

戦争と音楽をめぐる三つの秘話

河野 健

はじめに 昨年は戦後七〇年の節目を迎え、何かと話題の多い年だった。戦争をめぐる話は、各人それぞれに感慨一入であり、知られざる話も無数にあると思われる。以下、三つの話は知る人ぞ知る、必ずしも秘話とは言えないかも知れないが、戦争によって引き起こされた悲劇が音楽によって救われた逸話として、未長く、広く後世に伝えられて然るべきだと考えられるので、その経緯をここに改めて記しておきたい。

一、リリー・マルレーン

「リリー・マルレーン」をご存知だろうか？ マレーネ・ディートリヒは？ 「リリー・マルレーン」は一九一五年、第一次世界大戦で東部戦線に従軍したドイツ人ハンス・ライプが作詞し、一九三八年に同じドイツ人のノルベルト・シュルツェが作曲、一九三九年、最初にララ・アンデルセンが歌っ

たが、レコードの売れ行きはさっぱりだった。ところが、第二次世界大戦が始まり、ドイツが占領したベオグラードからドイツ放送がこの歌を流すと、ドイツ兵士に熱狂的に歓迎され、瞬く間に彼らの愛唱歌となった。そして、この放送を聞いた連合国側の兵士の心もとらえ、彼らにも歌われた。

マレーネ・ディートリヒは一九〇二年生まれ、一九二〇年代のドイツ映画全盛時代に女優として活躍し、一九三〇年代にはアメリカに渡って、ハリウッド映画に出演し、歌手としても活動した。反戦思想の持ち主で、ヒトラーの帰国要請にも応じず、アメリカの市民権を獲得して定住した。一九四四年にディートリヒが「リリー・マルレーン」を歌って大ヒット、ディートリヒが慰問に訪れた各地でこの歌を歌ったので、敵味方を問わず戦線の兵士たちによって盛んに歌われるようになった。

一九七〇年三月～九月に大阪で開催された万博にディートリヒが来場、九月八日のコンサートで「リリー・マルレーン」を歌い、往年のディートリヒを知っているオールド・ファンが詰めかけ、大反響を呼んだ。この歌は日本人を魅了し、梓みちよ、加藤登紀子などによって歌われ、一躍有名になった。しかしこの歌は、太平洋戦争中に日本で過激な言動を得なかつたドイツ兵士によって、既に日本で歌われていたのである。

一九四二年一月三〇日、横浜港に係留されていたドイツの輸送船ウツカーマルク号が突然大爆発を起し、日本船一

隻を含む計四隻の艦船が炎上した。この事故の詳細は、軍事機密に触れるとして報道されなかった。この事故でドイツ兵六一名、中国人三六名、日本人五名、計一〇二名の尊い命が奪われた。遺体は久保山斎場で荼毘に付された後、日本人の遺骨は遺族に引き渡され、中国人の遺骨は、南京墓地と呼ばれた地蔵王廟の安骨堂に暫く保管された後、中国へ持ち帰られた。ドイツ兵の遺骨は、身元が特定されなかった一六人分が根岸外国人墓地に埋葬され、身元の判明した四五人分はドイツ領事館で保管した。遺骨の一部は一九四七年二月にドイツへ持ち帰られ、残りの遺骨は一九四七年六月、山手の外国人墓地に、第二次世界大戦中、日本およびその周辺で亡くなったドイツ兵を悼んで記念碑が建てられた際に、そこに納められた。



マレーネ・ディートリヒ

○余名は、横浜市内の各所に分散して帰国の船を待ったが、来日した艦が横浜港へは寄らず神戸に入港したため乗船できなかった。ドイツ本国は帰国のための

ぶのだった。その哀愁に満ちた歌声に、箱根の人たちも心を通わせ、一体感が深まった。こうして、箱根の人たちと学童疎開の子供たちは「リリー・マルレーン」を日本人として最も早く知ったのである。

松坂屋旅館には大学生の息子、松坂進がいた。進は大学でドイツ語を学んでいたので、積極的にドイツ兵と交わり、すぐに親しくなって、彼らの相談役となった。一九四四年の暮れに、その進が招集されて軍隊に入隊することになった。ドイツ兵は口々に「死ぬんじゃないよ!」「生きて帰れよ!」と叫んで別れを惜しんだ。そして、誰からともなく「リリー・マルレーン」の歌を歌い出した。終戦により、進は無事、箱根に帰ることができた。ドイツ兵たちは大喜びをした。

一九四五年五月七日、ドイツは無条件降伏をしたが、彼らの態度は些かも変わることもなく、規則正しい生活を続けた。八月一五日には日本が敗戦を迎え、連合軍が進駐してきた。箱根にも米軍MPが現れ、ドイツ兵は武装解除を要求された。彼らはこれに応じ、ここにいる事情を説明したので、松坂屋旅館の占領は無事に終了した。

しかし、帰国命令はなかなか出なかった。さすがのドイツ兵たちも規律を失いかけていた。そんな時に、不幸な事故が起こったのである。一九四五年一〇月一〇日、三人のドイツ兵が小田原まで出掛け、メチルアルコールを入手した。この危険な飲料を、彼らは帰国できない苛立ちを紛らわせるため

船を派遣する余裕がなく、もしあったとしても、インド洋を通り喜望峰を回って無事帰国できる可能性は殆どなく、ドイツ兵は日本に留まらざるを得なくなった。

ドイツ兵は帰国まで箱根に滞在することになり、一九四三年四月二三日、横浜を発つて芦之湯・松坂屋旅館に到着した。翌日からドイツ兵は規則正しい共同生活を開始した。彼らは日本海軍から客としての待遇を受け、食糧を支給されていたので、食べ物に不自由はしなかったが、彼らにとつて最も重要な故郷の味である主食の黒パンが不足していた。原料は自前のものがあつたが、パン焼きかまどがない。やつと小田原に理想のパン焼きかまどを発見して歓声を上げた。それから小田原へパンを焼きに行き、相模湾で泳ぐという楽しみが増えた。

ドイツ兵は地元の人たちの親切に支えられ、一九四四年秋からは、学童疎開で神奈川県各地からやってきた子供たちとの交流も深め、無聊な日々を耐え忍んだ。彼らはいつ帰国できるかもわからないまま、結局一九四七年二月まで四年近くを箱根で過ごした。

彼らの楽しみの一つに音楽があつた。何かといえば三々五々集まって歌を歌った。それは日本人を魅了する見事な男声合唱だった。そして彼らも、戦場の兵士たちの間で流行っていた「リリー・マルレーン」を好んで歌った。この歌を歌うことによつて、彼らは故郷に残してきた恋人たちや母や妻を偲ぶに飲み、三人のうちの一人、ツェーレル・テオが帰国を待たずに亡くなった。ドイツ兵は、これ以上犠牲者を出さないようにと気持ちを引き締め、全員が協力して帰国までの残りの日々を頑張りとおした。

一九四七年、やつと帰国命令が出て、二月二三日に出発することが決まった。ドイツ兵は仲間の一人であつたテオの墓に詣で、一緒に帰れなかった無念さに涙を流した。

帰国の前夜、松坂屋旅館ではさよならパーティが開かれた。帰国するドイツ兵は箱根の人たちとの別れにあたって、感謝の気持ちを込めて「リリー・マルレーン」を歌った。これが最後の歌だった。翌朝、ドイツ兵は遂に箱根を降り、横須賀港に集められた他のドイツ人たちと共に、アメリカ軍が提供した貨客船に乗せられ、帰国の途について。

その後、帰国したドイツ兵は戦友会「日本クルー」を結成し、親睦会を続けていた。松坂進は元ドイツ兵士の数人と文



新井恵美子著「帰れなかったドイツ兵」(光人社)

通を続け、かつての絆を絶やさなかった。進は「日本クルー」のメンバーに招待され、一九九〇年秋に初めてドイツを訪れ

た。「日本クルー」の歓迎パーティーではあの懐かしい「リリー・マルレーン」の歌が流れた。

一九九一年は横浜港での爆発事件から四九年目、犠牲者の五〇回忌に当たっていた。その年の九月二四日、ルフトハンザ航空機が成田空港に到着した。到着口から出てきたのは、三人の女性を含む一人の年配ドイツ人一行だった。それは松崎進のドイツ訪問の返礼を兼ねて実現した「日本クルー」のメンバーによる四四年ぶりの日本再訪だった。彼らは観光旅行には目もくれず、思い出深い箱根の地で大半の時を過ごした。四隻の艦船が爆発した横浜港の現場を訪れ、かつての仲間が葬られている根岸および山手の外国人墓地を参拝した。箱根で一人眠っているテオの墓の前では感慨無量であった。彼らが苦心して作った阿字ヶ池もそのまま残っていた。その池をめぐりながら、彼らの口から流れ出たのは「リリー・マルレーン」の歌だった。こうして一〇月三日、彼らは一〇日の日本滞在を終え、帰国の途についた。後日談はまだ続くが、ここでは省略する。

二、あ、モンテンルパの夜は更けて

「比島」と言われても、高齢者はともかく、戦後生まれの人たちにはびんと来ないかも知れない。「モンテンルパ」も同様だろうか。「比島」はフィリピン（比律賓）諸島の略、「モ

ンテンルパ」とはマニラ近郊の地名で、ニュービリビッド刑務所がある。

この比島モンテンルパの刑務所で、戦後フィリピンによる戦犯裁判により有罪の判決を受け（そのうち大部分は冤罪だったが）、生死を分かつような過酷な状況に晒された日本の将兵一三〇余名がいた。

一九五二年に「あ、モンテンルパの夜は更けて」という歌が発表され、大ヒットしたが、それから六四年、この歌も、この歌にまつわるフィリピン戦犯の方々の数奇な運命も、殆ど忘れられてしまったのではないだろうか？

私が勤務していた職場には、医師の市瀬晴夫先生がおられたが、先生は一九四四年、二五歳で予備学生として出征し、翌年、海軍軍医大尉として、フィリピンで敗戦を迎えた。その後、フィリピンによる戦犯裁判で、冤罪であったにも拘らず控訴の術もなく、一方的に死刑の判決を受け、明日をも知



モンテンルパの市瀬晴夫

れぬ身の上となり、一九四八年二月一日、マニラ近郊モンテンルパのニュービリビッド刑務所に予備学生七名を含む一三〇余名の戦犯と共に収監され、約三年半に亘り服役を余

儀なくされた。

先生は、刑務所では囚人として心身ともに厳しい生活を強いられながらも、医師として同僚と共に同胞の治療に従事した。日本に残された奥様は、家財を処分して裁判費用に充て、病軀を押し、お茶の行商をして家計を支えながら裁判対策に明け暮れ、先生が所属しておられたYMCAを通じてキノ大統領に助命嘆願書を提出したが、願いは叶えられず、人知れぬ苦勞を重ねられた。

しかし、モンテンルパの受刑者の心の支えとなつて慰め、励まし、助命嘆願に尽くした人々がいた。

厚生省復員局法務調査部の植木信吉事務官は、一九四七年九月、比島戦争裁判関係業務担当を命じられた。フィリピン受刑者の苦境を知るに及んで、一九四九年一月、留守家族のための「比島戦犯留守家族会」を設立、自分の楽しみを打ち捨て、留守家族のために狂奔した。留守家族からの手紙や救済物資を裁判関係で渡比する人たちに託するなど、救済活動を活発化させ、同年一〇月以降、日本赤十字社、大阪商船、フィリピン航空の協力を得て、慰問物資を定期的にフィリピンに送るルートを開拓したほか、家族や知人から託された現金を密かにフィリピンに送る手立てを講じた。

高野山東京別院副主管であった加賀尾秀忍師は、植木事務官の懇請により、一九四九年九月一日にモンテンルパの（二代目）教誨師に任命された。一九四九年一月三日にマニラに到

着し、活動を開始したが、受刑者の窮状に接し、これらの人達を見捨てることは出来ないと、六ヶ月の任期を終えた一九五〇年三月三十一日以降も現地に留まり、その後約三年間に亘つて受刑者と同様の生活をしながら、支援活動に心血を注ぎ、教誨師としての務めを果たす一方、フィリピン政府、刑務所当局との折衝も積極的に行つた。

歌手の渡辺はま子は、敗戦を天津で迎え、抑留生活を送つた後、一九四六年五月四日に引き揚げてきた。帰国後は旧軍人への慰問活動を積極的に行い、一九五二年には巢鴨プリズンへの慰問も許可された。巢鴨で関口慈光教誨師にフィリピン下院議員ピオ・デュラン氏を紹介され、モンテンルパに一〇〇人を超える日本人が戦犯として囚われていることを知らされて愕然とし、モンテンルパへ慰問に行くことを熱望したが、フィリピンとの間にはまだ国交が回復していないため、実現は困難だった。加賀尾教誨師の存在も教えられ、文通によりモンテンルパの受刑者たちとも強い絆で結ばれるようになった。

その他にも（ここに個々の名前を挙げるのは省略したが）金銭的援助を惜しまない人たちが、救援活動を支えた日比両国の人たちがいたことを忘れてはならない。

死刑の執行は、一九四八年に三名に対して実施されて以来、行われていなかったが、一九五一年一月一九日、突然一四名が呼び出され、一九日夜半から二〇日未明にかけて絞首刑と



渡辺はま子

和条約が調印され、フィリピンも調印の参加国となったが、賠償問題で暗礁に乗り上げ、フィリピン側の批准が見送られたため、戦犯の釈放問題は遅々として進まず、日本での救助運動も消極的だった。加賀尾秀忍教師は、「この状況を打開するのは歌しかない」と考え、死刑囚の代田銀太郎に作詞を依頼し、その歌詞に同じく死刑囚であった伊藤正康が作曲した。

一九五二年四月二八日、講和条約発効の日に、モンテンパでは「独立記念式」が行われ、この歌がここで初めて「虜囚の歌」として披露された。

この歌の楽譜は、加賀尾師より渡辺はま子に送られ、「あ、モンテンパの夜は更けて」として、一九五二年六月二八日、渡辺はま子と宇都美清が歌ってレコード化され、二〇万枚を超える大ヒットとなった。

を聴き、しばらくして、「七月四日の独立記念日に二人を釈放してあげましょう」と述べられた。

キリノ大統領は、日本兵により妻と三人の子、及び親族五人を殺害されており、自身も日本の憲兵隊に監禁され拷問を受けた経験があり、日本に対する憎しみは人一倍強かったと思われるが、大統領が戦犯の釈放を口にしたのは初めてのことであった。

六月二六日、加賀尾師と金山参事官は再度キリノ大統領に面会した。大統領は、翌日胃がんの手術のためアメリカに向かうことになっていたので、面会者との応接に多忙を極めており、面会時間は限られていたが、「独立記念日を機会に、一部の戦犯に恩赦、釈放の恩典を与え、他の者も、死刑囚は無期に減刑、日本に帰還させるつもりなので、釈放が妥当と認められる者の氏名を挙げるように」と言われた。「死刑囚を二〇年有期刑とし、内地送還はできないか」との更なる要請は拒否された。

しかし、大統領の令弟アントニオ・キリノの説得により、大統領は態度を軟化させ、六月二七日の午後、「日本人有期・無期刑囚全員釈放、死刑囚を無期刑に減刑し、巣鴨に送還する」ことを決定したのち、夕刻にはアメリカへ出発した。フィリピンで犯した日本兵による残虐行為に対して、憎悪の念を燃やし続けた国民からの激しい反発も予想されたが、キリノ大統領の恩讐を超えた大英断により特赦令が發布され、「全死

なった。残された死刑囚は、次は自分の番かと不安に駆られ、絶望の淵に追い込まれた。

一九五一年年九月八日、サンフランシスコ講

一方、一九五二年五月一日には「戦争受刑者世話会」が発足し、敗戦で犠牲者となった戦争犯罪人の救済および海外受刑者の帰還などを促す救援活動を行った。六月五日には東京都民生局の「愛の運動」協議会が留守家族会と共同で都内約一〇〇ヶ所において戦犯釈放嘆願の署名活動を開始した。この運動はその後全国で展開され、一九五二年には戦犯釈放嘆願書に一千万人を超える署名が集まったという。ラジオ、映画などによる情宣活動も行われ、その結果、国内外の戦犯に対する国民の認識が高まった。一九五二年末頃にはモンテンパに同情者からの手紙が続々と届き、受刑者たちを励ますことが出来た。

一九五二年二月二三日、渡辺はま子はフィリピンに飛び、クリスマスの日にはモンテンパで慰問コンサートを行った。このコンサートは異常な盛り上がりを見せ、最後は全員で「モンテンパ」の歌を合唱し、祖国を偲んで、感涙に咽んだ。明けて一九五三年五月一六日、キリノ大統領に初めて謁見を許された加賀尾師とマニラ在外事務所の金山正英参事官は、渡辺はま子から届けられたオルゴール入りのアルバムをキリノ大統領に手渡した。大統領がアルバムを開くと、もの悲しいオルゴールの音が鳴り出した。キリノ大統領に「この曲は何というのか」と尋ねられたので、加賀尾師は「これは『モンテンパの夜は更けて』という曲で、モンテンパの死刑囚が作詞作曲したものです」と答えた。大統領は再度その曲

刑囚の終身刑への減刑と本国送還」が実現したのである。

一九五三年七月一五日、午前一時ごろ、受刑者たちはマニラに到着し、白山丸に乗り込んだ。七月二一日の夜、白山丸は横浜港に到着、二二日午前八時四〇分に大桟橋に接岸、九時三五分、留守家族や刑死者の遺族等、大勢の人たちの歓呼の声に迎えられて下船を開始、加賀尾師に導かれて一七名の遺骨を抱いた帰還兵一〇名がタラップを降り、遂に祖国の土を踏んだ。しかし、釈放者は帰国歓迎会に出席したが、元死刑囚五六名は一五分間だけ許された家族との面会後、そのまま巣鴨刑務所に送られた。

「七月三一日に、キリノ大統領が市瀬晴夫元海軍軍医大尉に対する特赦令に署名した」旨の通知が、九月になってフィリピン外務省から在日フィリピン代表部へ届いた。一連の手続きを経て、市瀬先生は一〇月一日に晴れて釈放された。

なお、巣鴨での拘留者全員が特赦により釈放されたのは、一二月三〇日の事である。



横浜港大桟橋の出迎え

市瀬先生は一九七一年、一九九一年、約二〇年間に亘りT銀行医務室長として勤務されたが、二〇一四年

一〇月一六日に九五歳の天寿を全うして亡くなられた。

三、「スプリング」と「クロイツェル」ソナタ

戦前、「ヴァイオリンの天才少女」と謳われた女性がいた。諏訪根自子である。この名前を聞いて、あゝ、あの人、とすぐに分るのは、やはり相当年配の人で、若い人には馴染みのない名前かもしれない。彼女も戦争で数奇な運命に翻弄された一人と言えよう。

根自子は一九二〇年に生まれ、四歳からヴァイオリンを習い始め、ヴァイオリンの教師として著名な小野アンナ（ロシア人のヴァイオリニストでオノ・ヨーコの義理の伯母）とロシア革命から亡命して来日したモギレフスキーに師事、めきめきとその才能を伸ばした。一九三〇年、



CD「諏訪根自子の芸術」
(COCQ-85013/4)

た。一九三〇年、来日中の名ヴァイオリニスト、ジンバリストに絶賛され、一九三二年四月九日にデビュー演奏会を開催した。一九三六年、ブラッセルに留学、二年

間滞在の後パリに移り、カメンスキー宅に寄留して同氏の指導を受け、一九三九年五月一九日にはパリ・デビューを果たした。

ところが一九三九年九月一日、ナチス・ドイツがポーランドに侵攻、第二次世界大戦が勃発した。根自子はドイツ軍がパリを占領後もパリに留まったが、パリでの生活は一段と困窮の度を増した。

そんな中、日独友好の音楽祭を企画したベルリン市長に招かれ、一九四二年一二月、ベルリンへ向かった。この音楽祭は実現しなかったが、大島大使が積極的に根自子の演奏の機会を作ったので、各地で慰問コンサートを行うようになった。一九四三年二月二日、ナチス宣伝相ゲッペルスは慰問演奏会を感謝して、根自子に名器ストラディヴァリウスを贈呈した。一九四三年春、根自子は一度パリに戻ったが、再度ベルリンへ来るようにとの要請を受けた。今度は、根自子の悲願であったベルリン・フィルハーモニー交響楽団との共演の依頼だった。根自子は一九四三年一〇月一九日、二〇日の二日間に亘り、クナッパーツブッシュの指揮で、ベルリン・フィルハーモニー交響楽団と協演した。

当時、ベルリンの日本大使館には大賀小四郎がいた。大賀は一九三七年に学者を目指してライプチヒ大学に留学し、ドイツ哲学の研究に勤しんでいたが、健康を害したこともあつて学究生活に見切りをつけ、折しも募集していた外交官官補

に採用されて、在独日本大使館に勤務することとなった。

大賀の趣味はクラシック音楽、特にヴァイオリン音楽を愛好していたので、大島大使の命を受け、根自子の演奏会などの世話をしているうちに、互いに心を通わせるようになった。

年末になり、根自子はパリに戻ったが、一九四四年六月六日、連合軍の大部隊がノルマンディーに上陸、怒涛の如くパリに迫ると、ドイツ軍は慌てて撤退、ドイツと同盟国の関係にある在仏邦人はベルリンの大使館からベルリンへの引き揚げを強く勧告されたので、八月二日、根自子は在留邦人と共にベルリンへの避難を開始した。この逃避行は苦難に次ぐ苦難の連続で、根自子は身の回りの持ち物をすべて失ったが、ストラディヴァリウスだけは肌身離さず抱え、命からがらベルリンに到着した。

ベルリン滞在中も、ベルンの大使館の計らいで、一九四四年一月、スイスでの演奏会が実現した。根自子がスイスへ移住して演奏活動が続けていけば、世界的に有名な演奏家として活躍できたかも知れないが、戦争はそれを許さなかった。

一九四五年一月末、ソ連軍は破竹の勢いでベルリンを目指して進軍し、ベルリン陥落は目前に迫った。ベルリンの大使館は二月中旬に南のバート・ガシュタインに避難したが、根自子は大島大使夫人の私設秘書の名目でその一行に加わるこ

された。

七月二四日、アメリカ軍からの連絡により、フランスのル・アーブル港経由アメリカへ送られることを知らされ、二五日に移動を開始、八月四日にル・アーブル港を出航して、八月一日にニューヨークに入港した。ペンシルベニア州のベツドフォード・スプリングで約三ヶ月の抑留生活を余儀なくされた後、やつと帰国が認められ、十一月一六日に当地を出発、アメリカ大陸を横断してシアトルに到着した。一月二五日シアトルを出港、一月二六日に浦賀港に入港して、約七ヶ月に亘る日本への帰国の旅は終了した。

一九四六年一〇月三日、根自子の帰朝第一回記念演奏会が開かれ、日本での演奏活動が再開された。根自子は巖本真理と並ぶ第一級の名ヴァイオリニストとして活躍し、日本各地へも積極的に足を運んで、その見事な演奏ぶりを披露した。根自子は聴衆の要望に応じて、得意とするベートーヴェンの「スプリング」と「クロイツェル」ソナタを好んで演奏した。しかし、一九六〇年の演奏会を最後に、根自子は表舞台から姿を消した。

一九六八年八月、根自子は東大教授となっていた大賀小四郎と結婚した。大賀が五八歳、根自子は四八歳、二人が最初に会った時から既に二五年余が経過していたが、大賀はベルリンから帰国まで苦勞を共にした根自子を忘れられず、種々の困難を乗り越えて結ばれたのだった。根自子は煩わしい演



CD「永遠なれ 諏訪根自子」
(KICC 1064)

奏スケジュールから解放され、家庭の主婦としての生活を楽しんだが、一日数時間の練習を欠かすことはなかった。一九六九年七月、根自子はケルンの日本文化会館初代館長として

赴任する夫に伴われて渡独、一九七二年秋まで館長夫人としての務めを果たして帰国した。

一九七六年九月二五日、根自子は久々の演奏会に出演して話題を呼び、一九八四年まで各地で演奏会を開いたが、一〇月二日のリサイタルを最後に引退した。彼女にとってバッハとベートーヴェンは最後まで挑戦すべき目標であった。一九七八年からバッハの無伴奏ヴァイオリンソナタとパルティータ全六曲の録音を開始、一九八一年にはLPレコードが発売された（一九九四年にはCDも発売）。その後一九八六年にはベートーヴェンの「スプリング」と「クロイツェル」ソナタの録音を行ない、一九九四年にCDとして発売された。これを最後に彼女は一切公の場に姿を現すことはなく穏やかな日々を過ごし、二〇一二年三月六日、九二歳で永眠した。

おわりに 今年の三月二九日に安全保障関連法が施行され、戦争は対岸の火事ではなく、身近なものとして意識せざるを得なくなった。戦争は絶対に起こしてはならず、世界の恒久平和を守りぬいていかなければならない。ここに記したような、戦争がもたらす悲劇が二度と起こらない様、平和を求め一層の努力が望まれる。

主な参考資料

- 鈴木明「リリー・マルレーンを聴いたことがありますか」
- 石川美邦「横浜港ドイツ軍艦燃ゆ」
- 新井恵美子「帰れなかったドイツ兵」
- 辻豊「モンテンルパ比島幽囚の記録」
- 加賀尾秀忍「モンテンルパに祈る」
- 渡辺はま子「あゝ忘れぬ胡弓の音」
- 深田祐介「美貌なれ昭和」
- 萩谷由喜子「諏訪根自子」
- CD解説書「諏訪根自子の芸術」
- CD解説書「永遠なれ 諏訪根自子」